

教育目標: ○自ら学び、よく考える ○進んで協力し、他人を思いやる ○心身ともにたくましく、最後までやりぬく 目指す学校像: ○生徒が主体的に学び活動する学校 ○教職員が協働して教育活動を創造していく学校 ○保護者や地域社会から信頼される学校 目指す児童・生徒像: ○自ら学びよく考える生徒 ○進んで協力し他人を思いやる生徒 ○心身ともにたくましく最後までやりぬく生徒 目指す教師像: ○教育に対する熱意と使命感に富む教師 ○一人一人の良さや可能性を引き出せる教師 ○研修意欲に富み互いを高め合う教師

領域	中期目標	短期目標	具体的方策	努力指標 (中間)	努力指標 (最終)	成果指標 (中間)	成果指標 (最終)	分析コメント	改善策
豊かな心と社会性	豊かな人間関係を育むとともに、命の大切さと人の心の痛みが分かる生徒を育成する。	<ul style="list-style-type: none"> 主体的な教育活動を通して自己肯定感を高め、いじめや不登校を防止する。 「道徳の時間を「自分なりの答え」を見出す時間とし充実を図る。 社会的能力(「自己表現力」「自己コントロール力」「状況判断力」「問題解決力」「親和的能力」「思いやり)」を高める。 	生徒一人一人のよさを見つけ、認め励まし伸ばす指導。三中いじめ防止基本方針に基づいたいじめ防止と対応を図る。	3 87.5%		4 100%		教員は認め励ます指導を心がけ行っている。また、いじめ防止基本方針に基づき対応を図っている。アンケートや教員の認知により解決に結びついている。今回は臨時休業、分散登校もあったので十分な人間関係が出来ていないことも考慮し対応を考えていく必要がある。	今後も生徒の良さを見つけ、生徒の自己肯定感を高める指導を行い、いじめの防止に努めていく。また、1学期はクラスで取り組む活動などが少なく、今後も今までのような活動ができないことも予想されるので、それを補う活動も考えていく。そして現在の新型コロナウイルス感染症に関わる、中傷やいじめが起きないように生徒への指導を行っていく。
			「特別の教科 道徳」は、指導方法を工夫し、「考える道徳」「議論する道徳」を推進する。評価は、生徒の良さを認め意欲につながる評価を行う。	2 75.0%	4 83.8%	「意欲的に取り組めた」とする生徒は、84.2%、「自分なりの答えを見いだすことができた」とする生徒は、86.5%と比較的高い結果となった。また「自分の意見や考えを発表したり、伝えたりすることができた」とする生徒は、80.7%と若干低くなった。これはコロナ対応による発表の機会などの減少も影響していると考えている。また教員の取り組みについては例年よりも実施できた授業時数が少ないことも影響していると考えている。	昨年度に引き続き、道徳の評価に関する校内研修を行い、生徒の良さを評価し意欲的に生徒が取り組む授業を目指していく。また、学年全体で行う、学年道徳やローテーションでの授業など指導法の工夫も図っていく。また、1学期の臨時休校、分散登校による授業の欠時については、水曜日の6校時の実施、土曜授業の実施により授業時数確保を行っていく。		
			教育活動の様々な場面で、それぞれの教員の持ち味を活かし、生徒の社会的能力を高める指導を行う。	3 87.5%	4 84.0%	臨時休校、分散登校など十分な形での指導ができないう状況もあったが、社会的能力が高まったとする生徒は84.0%と比較的高い結果となった。また社会的能力を高めるため、各教員の持ち味を活かした様々な取り組みも見られた。	臨時休校、分散登校中に様々なことを考え、社会と向き合う時間をとれた生徒も多く、その中で社会的能力を高めることができたことと自覚している生徒も多い。今後の生活においてもそれを踏まえ、生徒の社会的能力の向上を図っていく。また、それぞれの教員の持ち味を活かした取り組みを継続していく。		
確かな学力	基礎力、思考力、実践力をバランスよく育み生徒一人一人に確かな学力を育成する。	基礎的な知識や技能を習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等を育むとともに、学びに向かう力を高める。	授業のユニバーサルデザイン化を図り、分かる授業をすすめる。考えさせる授業、理由を示しながら自分の考えを表現させる授業など、学習活動を工夫する。	4 100%		4 85.4%		授業のめあての提示やICT機器の効果的な活用など授業のユニバーサルデザイン化については、教員の意識は高くなっている。授業が楽しくわかりやすいとする生徒も高い割合になっている。例年、2学期以降この割合が下がってくる傾向があるので対応を図っていく必要がある。	授業のユニバーサルデザイン化については今後も推進していく必要がある。また、1学期には、理由を示しながら自分の考えを表現させる授業など発表活動が十分にできない部分があったので、可能な授業の形を検討しながら行っていく。
			朝読書、質問教室、補充教室、サポート教室等を実施し励ましや肯定的な声かけ等、個に応じた指導を充実させる。	3 83.3%	4 85.6%	個に応じた指導については、昨年度中間評価では、95.7%と高い評価であったが、今年度は83.3%と教員としては十分にできなかったと感じている。また、基礎・基本的な知識や技能を身に付けられたとする生徒は昨年度の76.8%から今年度85.6%と高くなっている。	教員と生徒の評価の差はあるが、今までの取組を今後も継続し、生徒の基礎・基本的な知識や技能の向上を図っていく。また、まなびポケットやライズライブラリーの活用を図り、それぞれの生徒が個に応じた学習を行えるよう支援していくこともすすめていく。		
学校居心地感	生徒の学校居心地感を高める。	生徒の心の居場所、生徒同士のきずなづくりの場所のある環境づくりをすすめる。	生徒の実態を把握し困難さに応じて様々な工夫や手立てを講じる。教科の学習、行事、部活等様々な場面で生徒の学校居心地感を高めるアプローチを行う。	4 100%		2 82.8%		生徒の学校居心地感については、1年生が一番高く、3年生が一番低い結果となった。1年生は初めての環境の中それぞれに居場所やきずなづくりの場を見出し学校居心地感を高めることができたが、今までの生活とは異なる中、行事など今までできていたことができない状況に、学校居心地感を高めることができなかった3年生が多かったという結果になったと考えている。	学校居心地感の低い生徒に対しては、個別面談等を活用し相談活動を充実させていく。また、今までと同様なことができない現状の中でもノーチャイム生活など三中の新たな伝統をつくることのできた上級生にその素晴らしさを自覚させ、学校に愛着をもたせ、学校の居心地感につなげていく。それぞれの教員の持ち味を活かし居心地感を高める取り組みをさらにすすめる。